続　まだら模様の走馬燈

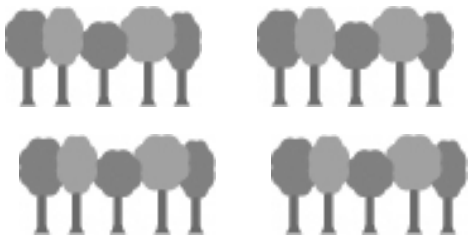
小野忠男

眠れぬまま、あれこれ想いが頭の中を通り過ぎて行く。朧に霞む懐かしさの、ゆっくりと廻る走馬燈の景色が、幼年時代の暗鬱とした想いにたどりつくと、思い浮かぶあの電燈の灯った廊下は、なんだったのだろう。

顔も覚えていない母の入院した病院だったのだろうか。今は誰に訊く術（すべ）もない。

今年の年賀状で、最も懐かしく、受け取って驚いたのは、沼津のルンビニ幼稚園で受け持たれた杉本静子先生からの賀状だった。

キンダーブックを読んでくださり、母馬と子馬が、旅の途中ではぐれてしまい、生涯母馬を探し求める子馬が可哀想で、母恋しと涙ぐんだ思い出があるあの時の先生とのやり取りを思い出す。沼津の下小路に住んで居られる先生の賀状は、墨色も鮮やかな肉筆の宛名と、＜お変わりございませんか、沼津へいらっしゃったときにはお立ち寄りください＞と書かれてあった。もういくつになられたのだろうか。



去年の暑中見舞いの葉書に返事がなくて、入院でもされたのかと、思っていたのに。

五年ほど前、沼津で中学のクラス会があった時、先生がまだご存命だと同級の女子の方が労をとり、料亭で昼食をご一緒したことがあり、そんなことから懐かしい旧交が始まったのだった。

同級の中野君とは、その席でも一緒で、何回かのクラス会で宿も共にして、夜を徹して話し合った仲であった。

彼は立派なお医者さんになり、熱海の病院長だった頃、著名な作家杉本苑子氏の主治医であった。直木賞、吉川英治賞、菊池寛賞などを貰い、熱海市の名誉市民になっていて、文化勲章も貰った作家ということだった。

彼が若いときドイツに留学した話は面白く、話題は尽きない。そして、小野くん、あちこち痛いといっても、今まで生きてきたということは素晴らしい事で、あとはお釣りみたいなものと思いなさいといい、旅館の廊下を、本当に静かに慎重に歩く姿が目に浮かぶ。この歳になったら転ぶ事が命取りになります。寝たきりになるきっかけですからと、医者の目で話された。一昨年の１１月のクラス会で会食し、帰途戸塚の駅で別れたのだが、明けて昨年１月に入って、訃報を聞いて驚いた。もう会いたくても会えないのである。

友人のＴさんが、本を貸してくださった。同じ映画フアンのよしみからである。

題名は＜キネマの神様＞、著者は原田マハ。迂闊にもこの作家とは初対面であった。

驚いた事に本の奥付の裏に購入日が鉛筆で記されてあり、それが僕の誕生日だったので、ちょっとドキっとして、何かの因縁を感じたのである。

この頃は眼が疲れるので、昔はあれほど読んでいた文学書から遠ざかり勝ちだが、好きな映画が主題なので、引き込まれた。

「歩」という名の四十ぐらいの独身女性が主人公で、著者本人が主人公かと思うほど、

多分に私小説的な軽いタッチの文体である。父と母が暮らすマンションの管理人室は九段下駅まで三分の都心だが、ちっぽけな部屋。ギャンブル好きで借金まみれの７９歳になる父は、麻雀や競馬にあけくれ、娘にいつも借金の尻拭いをしてもらっているなんとも取り柄の無い親父だが、心筋梗塞で入院し、再開発企業で女性で初の課長になった娘は周りのやっかみや妬みから、あらぬ噂で、プロジェクトからはずされ、異動通達から辞職してしまう。

十七年間勤めた会社から貰った三百万円の退職金だったが、父が消費者金融や友人などから借りている金額が同じ三百万円だったとは。

夜逃げも自己破産も経験して、六十二歳のときにやっとマンション管理人に落ち着いたのに、相変わらずギャンブルと映画にうつつを抜かしてる。

飯田橋のそばにある「テアトル銀幕」という名画座の主人テラシンと、ゴウさんと呼ばれる父とは仲良しである。あるとき管理人日誌の片隅に映画の感想が十七年もの間父が書いているのを見つけた娘、大学時代映画評論などを勉強した目には稚拙な文だが、ひたむきな面白さがある。映画雑誌の老舗「映友」の高峰という女性社長から、歩に電話が入る。映画の評論を書いてみないかとの誘いに耳を疑う。管理人室を訪れた時、広告紙の裏に、ちょこっと書いた映画のメモを父が娘の思いを伝えようと「映友」に秘かに投稿した文が高峰さんの目に止まり、映友社への就職が一方的に決まってしまう。父のギャンブル依存症の父の再生計画。ギャンブルを厳禁され、生きていく事の気力をなくした父、自分の好きなことに徹底的にのめりこんできて、家庭を顧みなかった父。

高峰さんには二十九歳の引きこもりの興太君がいる。テレビゲームとパソコンの世界に没入して母親と顔も合わせないほどだ。「映友」にウエブサイトが立ち上げられ、映画のことで、日夜書き込んで荒らす輩がいる。半端でない内容のマニアの書き込みの中にあった「ばるたん」というハンドルネームの人物こそ興太君であることが判ってくる。パソコンを打ったことも無い父が映画の話題から興太君とのブログ上でのやり取りに発展し、父ゴウさんの文章が、評判になってくる。永年書き溜めた映画感想ノートをウエブサイトに連載してみないか、最近見た映画の感想もどんどん書いてウエブサイトに掲載してみないかと話は広がり、円山ゴウちゃんの人気が高くなる。

アメリカにいる歩の友人「清音」が英文にして日本人以外の人たちにも読んでもらえる手助けをしてくれてから、ケビン・コスナーの「フィールド。アブ。ドリームス」の評論で、アメリカからの反応もあるようになる。中にローズ・パッドと名乗るアメリカ人からの評論は本格的な辛口で、痛烈な反論のうえに、「ハゲた脳みそでもわかるかな」とおちょくってくる。それからのゴウちゃん対ローズ・パッドの丁々発止のバトルのやり取りが、この作品のもっとも活き活きしたプロセスで、各人の映画の読み方、理解の仕方の違いを「七人の侍」や、「フィールド・オブ・ドリームス」、クリント・イーストウッドの「硫黄島からの手紙」「父親達の星条旗」のやりとりが面白い。「ニューシネマ・パラダイス」「シンドラーのリスト」「シャイニング」「ライフ・イズビューティフル」「カッコウの巣の上で」・・・・過去の名画がいくつも出てきて、その上シネスイッチ銀座などという実

在の映画館まで出てきて懐かしい。名画座テアトル銀幕の終幕を止めようと努力する人たち。
最後に大きな感動で盛り上げるストーリーの巧みさは、軽いさりげない小説が輝く瞬間だ。

暗闇の中にエンドロールが流れている。

観るたびに思う。映画は旅なのだと。

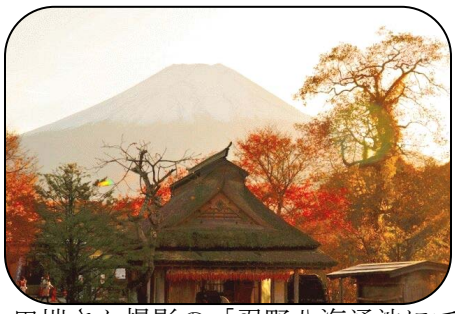
最後の一文が消え去った時、旅の余韻を損なわないように、
劇場内の明かりはできるだけやわらかく、さりげなく点るのがいい。

片桐はいりという女優さんの解説の書き出しである。
学生時代から足かけ七年、映画館の入り口でチケットをもぎるアルバイトをしていたことがあり、僕と同じ三度の飯の次くらいに好きな映画フアンだという。
そして、この小説に唯一実名で出てくる銀座和光裏のシネスイッチ銀座が職場で、この小説のハイライト「ニューシネマ・パラダイス」を単館で公開した映画館だったという。
なんとも奇妙な回り合わせ、若い頃、僕も何回か通った映画館なのである。

山川さん提供の「氷壁」

それから、しばらくした或る日、昨年の１０月１２日の日経新聞の文化欄に、「パリに咲いたルソーを巡る画家たち」という連載（１０回）が始まった。
ルソーの絵の横に解説者の名前が原田マハ（作家）とあり、驚いた。
ルソーに始まり、ピカソ、マティス、ローランサン、ドローネー、ヴァン・ドンゲン、藤田嗣司、モジリアーニ、スーチン、デ・キリコ、と１０枚の絵の解説は実に詳しく、絵にも造詣が深い人なのである。ニューヨーク近代美術館に勤務したこともあると知り、一層興味を持った。
年末の２０１２回顧文学の文の中に、高樹のぶ子「マルセル」（毎日新聞社）と共に原田マハ「楽園のカンヴァス」（新潮社）が、物語の醍醐味を伝えるミステリーの秀作と取り上げられ、わが意を得たりと頷いた。この作品で山本周五郎賞を受賞し（山本周五郎は僕の大好きな作家なのである）その上、１４７回の直木賞にもノミネートされたと知り、嬉しくなったのである。
応援したい作家である。

田端さん撮影の「富士五合目にて」


田端さん撮影の「忍野八海湧池にて」